

§ 1-3.

実験 A 全体考察

1. 顔の性別認知における肌色の作用

我々は無意識のうちに対象となる顔を総合的に判断し、性別というラベル付けをする。しかし、ただ形のみを見て判断しているのではなく、肌の色や唇の色といった色彩的要素も参照した上で男女の判断がなされていることが示唆された。つまり、性別の準拠枠 (frame of reference) として色彩が作用したといえる。具体的には、色白肌において対象を女性と判断させやすくする傾向が見られ、赤みを帯びた唇も条件によってはそうした作用を持つことが確認された。これらの結果は裏返せば色黒肌や赤みのない唇が男性判断を促し、男性的印象を付加するとも表現できるものであり、色白肌、薄紅の唇による女性性付加作用、色黒肌、赤みのない唇による男性性付加作用の双方から捉えることが可能である。

しかし、本実験で得られた色彩の作用は単純にまとめあげられるものではない。従来男性的、女性的であるとされてきた要素が完全に独立したかたちで性別判断を左右するのではないということも同時に明らかとなってきた。性別の印象において色彩の影響を多分に受けるのは形態的に女性性が付随する場合であり、ここでは色白肌による女性化作用が顕著に見られたといえる。

2. 形態による明るさ認知への作用

また同時に、物理的特徴の認知レベルにおいても、形態情報、色彩情報は相互に作用を及ぼし合っていることが示唆された。女性的形態においては肌の色がより明るく、逆に男性的形態においてはより暗く感知される可能性が得られ (Figure 1-2-7 参照)、反対に白く明るい肌が伴う場合には丸みを帯び、暗い色の肌の場合には角張って感知されるという結果が得られた。換言すれば、ある要素について物理的に等価な刺激であっても、付帯情報によって異なる認知がなされたということになる。全体を包括的に捉えようとする我々の情報処理特性がここからも把握できるが、考察で述べたように、視覚的な物理刺激のみでなくいわばラベルとなる性別表象が影響した可能性も指摘できる。

顔形態の女性度の高さが肌色明度をより明るく認知させる傾向は高明度領域に限って認められたが、「色白=女性」という一方向的な固定観念が強く働くために本実験のような結果が得られたことも推測できる。このように考えた場合、女性的印象に対して色白肌はいわば加算的な要素として捉えられ、そうでないことが減算的に作用する可能性は小さいと考えられる。

3. 顔の認知と視覚経験

本研究においては性別判断、肌色の評定等において前述のような傾向が得られたが、これらの認知的特徴を支えるものとして視覚経験の作用を探ることが第一に要されると思われる。つまり、ここで想定されることは視覚的に接触してきた経験により認知傾向が方向付けられるということであるが、接触経験の影響については様々な見地から示唆を得ることができる。鈴木（1990）は人種や文化の異なる人物に対し、肌色の好ましさを評定させているが、日本人が白人の顔を評価する場合であってもその評定には日本人における肌色の好ましさが反映されたと報告している。また逆に、他人種効果という観点からその視覚的接触による情報の蓄積の作用を読み取ることもできる。芝木（2001）は日本人と北欧人の顔を評価対象として研究を行い、他人種である北欧人の顔を対象とした場合に好ましい肌色が特に曖昧になるという傾向を得ている。しかし一方では北欧人に対して好ましいとされる色が日本人に近いやや黄み寄りの肌色であったことも報告されており、鈴木の研究と同様の傾向もまた示されている。これらの結果より我々の認知特性が実際の視覚経験に多分に規定されることが示唆されるが、同時に視覚経験が十分にある自人種に対しては肌色における準拠枠が確立されていることを窺わせる結果でもあると捉えられる。

4. ジェンダースキーマの非等価性

前述のように接触経験が認知的特徴を左右するとすれば、情報として取り入れられる女性像においても色白肌への方向付けがなされていなければならない。柳瀬らによると、印刷物において女性の肌色は赤み寄りかつ高明度で再現されているとされ、肌色の記憶色は実際の肌色に比べ明度が高い傾向にあることが示されている（柳瀬ら、1970）。つまり、メディアが発する情報を含めた接触経験により肌の色に対する記憶

色が調整されていることが推測されることである。視覚経験される男女の像とは、生物的男女差がそのまま表れたものではなく、そこには社会文化的規定要因が多分に含まれる。本来の生物的な男女の差異の上に社会的に規定されるジェンダーによって更なる強化がなされ、社会的要求に応じて各性別の人物像自体が変化していくことによって肌色や唇色といった色彩と性別との連合が強められるとも推測できる。「女性=色白」という社会的固定観念を土台に色白の人物を女性として認知する目が育てられ、その傾向を更に誇張したかたちでメディアは情報を流し、現実の女性達はそれを取り入れ模倣する。特に女性に対して強く働く色彩との結びつきの裏には、こうした流れを一巡として円環状に固定観念が強められていく社会背景があるものと考えられる。

5. 女性と肌色変化の結合

本研究では女性平均顔に対する印象評価において色白化による女性化が特に得られたが、視覚経験がその傾向を支えているのであれば、実際の女性、或いは社会的に規定される女性像にも多様性が認められることが考えられる。では、性別によって多様性に不均等が生じるメカニズムとしてどのようなことを想定すべきなのだろうか。相良の研究では性ステレオタイプへの柔軟性に対し発達のアプローチを行っている。ここでは、まず女子の方がより高い柔軟性を示すという傾向が認められている。学年が上がるにつれて男性は（女性は）このようであればならないという硬直化した信念が和らいでいくものの、その許容度は女性の方がより高いと捉えられたのである。また、Bauerの25ヶ月齢児を対象とした実験では、女兒は「男性的な行動」「女性的な行動」「中性的な行動」の三者を等しく記憶し、かつ真似できていたのに対し、男児は「男性的な行動」を特によく記憶していたとされる（Bauer, 1993）。これらの研究は子どもを対象として行われたものであるが、これらの結果が示すことは男女におけるジェンダースキーマの非等価性である。自己の内に築かれるジェンダースキーマは男性の方が強固かつ偏りのあるものであり、逆に女性の方はより柔軟に幅広い情報を許容できるとも捉えられる。こうした各性別が持つジェンダースキーマを反映して体現される姿にも不均等が生じてくる可能性がある。この延長上に、画一的な男性像、多様な女性像が現れることを推定することもできよう。

6. 観察者としての男女差

肌色の準拋枠的性質に見られた男女の違いについてこれまで述べてきたが、本研究においては今一つ観察者としての男女差も認められた。男性は色彩に対して比較的安定的な反応を見せ、一方の女性は対象が女性であると判断される場合において、特に色彩に対する際立った反応を示した。つまり、この結果からは女性は女性に対する固定観念により強く縛られていることが捉えられる。言い換えれば、女性は女性という対象において色白肌が持つ女性的意味付けを強く読み取っていることが推測される。男性に対して、こうあるべき、これが好ましいといった肌色の方向付けが全くなされていえないとはいえないが、女性に対する色白への方向付けと比較した場合には非常に弱いものであると捉えられる。女性はより誇張されがちな女性像を頻繁に取り入れることになり、視覚的な接触経験が認知傾向を規定しているとするのであれば、結果的に女性という対象において特に肌色に対する敏感さを示すことになると考えられる。反対に、男性観察者における肌色の作用は顔パタンの性別によらず比較的均等になり、女性観察者における当該の作用は女性において著しいものとなることが予測される。

また、肌の色、唇の色を直接的に変更できる手段である化粧に関する情報量の差が影響していることも考えられる。ここで注意すべきは化粧の加工性の高さである。視覚的に触れる成人女性像は男女間で等しいものではなく、男性は女性に比べ、圧倒的に「加工」後の姿を目にする機会が優勢となるものと思われる。化粧による女性の変化の様子を日々視覚的に経験する女性については、微細な色彩の変化であっても大きな印象の変化として感受する可能性が存在すると考えることもできよう。

本研究においては、色彩による性別の印象の強化、或いは攪乱の可能性が得られた。だが、そこには認知する側の目が必要である。固定観念、ジェンダーステレオタイプの存在、そして顔における色彩の影響力の男女不均等は否定できない結果となったが、続く実験では更にその「目」を育てる背景を探り、認知的側面からジェンダーの現在の在り方に対する考察を深めていく。